「人の手で作られたもの」　　２０２６年１０月２５日　　主日礼拝
使徒言行録　第１９章２１～４０節

私の実家は、新潟の田舎で小さなせともの屋をしていました。お店では、神棚に飾る榊立てや仏壇に供える専用のお椀なども取り扱っていました。家の宗教は仏教でしたし、商売をやっていたので実家には仏壇と神棚が両方ありました。父は特に信仰熱心だったわけではありませんが、毎年除夜の鐘がなる頃には必ず神棚に飾ってあったお札を持って近くの神社に出かけていきました。一年の終わりに古いお札を焼き、新しいお札を買い求めてくる。それが年越しの年中行事でした。私は姉と弟の３人兄弟でしたが、父と一緒に神社に出かけるのはいつも私だけでした。ですから、紅白歌合戦も中学の時からまったく見なくなりました。そういう私も特に信仰心が強かったわけではなく、むしろ好奇心から一緒についていっただけでした。好奇心が強かった私は、お札の中に何が入っているのか知りたくて中を開けて見たことがあります。罰当たり者とでもいうのでしょうが、当時の私には神社の神様への恐れよりも好奇心の方がまさっていたようです。でもお札を開けてみると、中には何も入っていなくてとてもがっかりしたことを覚えています。年越しには、その中身のないお札を神社に持っていって、大きなかがり火で焼きます。火が強くて近くにいけないので、細い竹の先を二つに割ってそこにお札を挟んで燃やすのですが、その同じ火に竹の先にするめを挟んで焼いている人がいました。私は幼心に、するめと一緒に焼かれてしまう神様っていったい何なんだろうと思ったことを覚えています。

神社の参拝は、出かけていってお参りをする。そのことに意味があるようです。家内安全、交通安全、商売繁盛。さまざまな願い事をするために出かけていく。わずかばかりのお賽銭で、たくさんの願い事をする。普段は神社なんか観光名所巡りでもなければ近寄りもしないのに、年末年始になると神妙な気持ちになって参拝に出かける。何が祭られているのかもよく分からずに、ともかく出かけていってそこで参拝することが大事。いつもそんな年越しを迎えていました。

もう３０年近く昔になりますが、私が福岡教会にいたころ、こんなことがありました。ある方から、「先生は山笠、お好きですか？」と尋ねられたのです。山笠というのは、福岡でたいへん有名なお祭りです。私はまったく興味がなかったのでそう答えると、その方はつまらなそうにしていました。福岡に行ってから、教会でも「山笠に行かれましたか？」とよく尋ねられました。そこで、ある日の礼拝の説教でこんなことを語りました。「何が悲しくて、キリスト教の牧師が神社に奉納するお祭りをわざわざ見に行かなければならないのか」。すると、「何が悲しくて」というフレーズだけがとても受けました。

福岡教会は幼稚園を持っていましたが、妻が働いていたために一番下の息子の真祈人は近くにあった早緑保育園に通っていました。早緑保育園は鳥飼バプテスト教会の横にある保育園で、同じ敷地内にある舞鶴幼稚園とともに西南学院に所属している幼稚園ですので、キリスト教をベースにした保育を行っています。その早緑保育園で夏祭りが行われました。すると、その夏祭りで、なんと子どもたちがお神輿をかつぎ、盆踊りをしていたのです。キリスト教の保育園ですから、当然、お神輿には神社の神々が祀られているということはないのですが、お神輿といい盆踊りといい、およそキリスト教の保育園がやるにはとてもふさわしくないと感じたことを覚えています。

町の小さな神社が繰り出すお神輿には神道の神々が奉られているということがはっきりとわかるのですが、山笠のようにお祭りが大きくなればなるほど、その根っこは神社の奉納の祭りであるにもかかわらず、文化や伝統行事と取り違えられてしまう。しかし、このいかにも文化的で伝統行事のような顔をしているものほど、私たちは気をつけなければなりません。かつて徳川家康は日本の国民をうまく収めるために文化・伝統の一環として、仏教を仏壇という形で個々人の家の中に取り入れさせました。文化・伝統という顔をした宗教色の強い習慣が、私たちのまわりにたくさんうごめいています。盆踊りというのも、もともとは先祖を供養するという先祖崇拝の宗教的儀式です。そういう文化・伝統的な顔をした行事に、私たちも知らず知らずのうちに、巧妙に取り込まれているのです。

私は大学時代、理論物理を学んでいました。理論物理と言いますと、いわゆるつぶしの利かない、実生活にはほとんど役に立たない学問です。理論物理は、基本的には何か物を作ったりはしません。この世の中にある自然法則を見つけて、それがニュートンの万有引力の法則だったり、アインシュタインの相対性理論だったり、とても調和のとれた美しい数式や理論になっているという、すばらしい世界を見させていただく。そんな学問です。けれども、理論物理に携わった人たちが持っている共通の世界観があります。それは、この世界が一つの数式や整った理論によって動いているのは、私たち人間の業では決してないということです。そこには、一つの数式や整った理論によってまとめられる美しい世界を造り上げ、コントロールしている何か、人間を超えた何かがある。それが力なのか、それとも存在なのか、それはよく分かりませんが、ともかく人間を超えたパワー、もしくは超越的な存在がそこにはある。これが、物理に携わったことがある人たちが大概感じていることなのです。それが、キリスト教の天地創造の神につながるかどうかは別の話ですが、人間には決して届かない何か特別な存在があるのです。

パウロは、「手で造ったものなど神ではない」とエフェソの人々に語りました。人の手によって作られたものが神であるはずはありません。人が神によって造られたのです。出エジプト記で、エジプトの奴隷から解放されたイスラエルの民はモーセに導かれて荒れ野をさまよいます。出エジプト記１９章には、主なる神様がシナイ山に降り、イスラエルの民の中からモーセを呼び寄せられる場面が出てきます。モーセはシナイ山で、主なる神様から十戒をはじめとするさまざまな戒めをいただきます。エジプトの奴隷から解放され自由になったイスラエルの民が、本当の自由人として歩むべき道しるべとして、モーセに戒めが語られていくのです。それが出エジプト記３１章まで続くのですが、３２章に入りますと、山からなかなか下りてこないモーセを心配して、モーセの兄のアロンのもとに集まったイスラエルの民は、アロンに向かってこう言います。「さあ、我々に先立って進む神々を造ってください。エジプトの国から我々を導き上った人、あのモーセがどうなってしまったか分からないからです」。すると、アロンはイスラエルの民に金の耳輪を外して持ってくるように命じ、それで若い雄牛の鋳像を造ってこう言いました。「イスラエルよ、これこそあなたをエジプトの国から導き上ったあなたの神々だ」。エジプトの奴隷から無条件で解放され自由を得たイスラエルの民でさえ、自分たちのリーダーが不在の際に自分たちのための神々を作り上げるのです。なぜでしょうか。彼らは、自分たちの思いを聞いてくれる神、

自分たちの思い通りになる神を作り上げたかったからです。人間の思い通りになる神々。聖書は徹底的に、人間によって作られた神々を廃します。

出エジプト記２０章に十戒が出てきます。旧約聖書１２６ページになりますが、十戒の第一戒、いちばん大切な戒めは、２０章３節、「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」と記されています。口語訳聖書では「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない」と訳されています。神以外のものを神とすることは、第一の戒めで固く禁じられているのですが、続く第二戒でもこのように記されています。４節、「あなたはいかなる像も造ってはならない」。これも口語訳聖書では、「あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない」と訳されています。さらに、第三の戒めでは、７節に「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない」と記されています。これは、レビ記１９章１２節を参照するとわかりやすいと思います。そこには、こう記されています。「わたしの名を用いて偽り誓ってはならない。それによって神の名を汚してはならない。わたしは主である」。このように、十戒ではその第一戒から第三戒まで、神以外の偶像の神々を禁じ、神の像を造ることを禁じ、神の名をみだりに語ることを禁じているのです。

パウロは、エフェソで偶像の神々と対決しました。それは今日の聖書の箇所に記されているように、偶像の神々を用いて銀細工人たちにかなりの利益を得させるため、すなわち金儲けのためだったのです。ですから、今日の聖書の箇所の２８節以下では、エフェソの人々が暴動を起こし、たいへんな騒ぎになったことが記されています。金儲けのために人の手によって作られた偶像の神々は、人々を幸せにするどころか、貧富の差をもたらし、人々を不幸にします。日本でもちまたで起こっている新興宗教の問題や、統一協会・エホバの証人の問題を見れば明らかです。私たちも、私たちが信じているまことの神はどういうお方なのかを聖書からしっかりと聞き、共に学び合いながら歩んでいきたいと願います。

最後に、詩編１１５編４節から８節を読んで終わりたいと思います。旧約聖書の９５５ページです。詩編１１５編４節、【国々の偶像は金銀に過ぎず、人間の手が造ったもの。口があっても話せず、目があっても見えない。耳があっても聞こえず、鼻があってもかぐことができない。手があってもつかめず、足があっても歩けず、喉があっても声を出せない。偶像を造り、それに寄り頼む者は、皆、偶像と同じようになる。】

お祈りしましょう。